

金棒池〈かなぼういけ〉（垂水区神出町）

神出町の東のはしに、雌岡〈めっこ〉山と雄岡〈おっこ〉山という形のいい山があります。この山は、形がいいので、昔から播磨富士と呼ばれています。遠く明石海峡からでも見えます。飾磨郡の家島からでも、くっきりと二つの山だけが見えますから、海に出る漁師の目じるしにもつかわれている山です。

あまりに形がいいので、たまたま、ここを通りかかった弁慶〈べんけい〉は、この二つの山が自分の庭山に欲しくなりました。弁慶は、強力といわれていましたから、あの金棒で、この山をかついでいこうと考えました。

そこで、山に金棒をつきさして、弁慶はかつごうとしました。しかし、いくら力持ちといっても、二つの山をかつぐということは、なかなか容易〈ようい〉なことではありません。あまり、山が動きませんので弁慶は、腹をたてました。その腹立ちまぎれに、ありったけの力を入れて「エイッ」と持ちあげますと、あら、どうしたことや、その太い金棒がぽきりと折れて、そのまま、山と山の間、どすんと落ちてしまいました。

金棒がおれて、落ちたそのあとには、地面が長い金棒形にくぼんでしまいました。やがて、ここに水がたまり、大きな池になってしまいました。池の中に、ちょうど二つの弁慶の足あとが残っています。島になってのこっているのが、弁慶の足がただといわれています。

足がたといわれているのは、実は、古墳〈こふん〉です。前方後円のかわいらしい古墳が、二つ、この池の中に残っているところから、このお話が生まれたのでしょうか。

